

米国外交の設計者

佐橋亮・東大東洋文化研究所准教授



キッシンジャー氏は国際政治学者であり、外交官であり政治家であった。さまざまな顔を持ち合わせており、毀誉褒貶のある人物だ。ただ、私は「米国外交の設計者」だったと考えている。大国外交の力で国際秩序を形成し、米国にとって有利な状況を作りながら、世界の平和と安定につなげようと尽力したと言える。

ベトナム和平でノーベル平和賞を受賞し、中東におけるシャトル外交でも知られるが、今も影響が大きく残る実績は、やはり対中関係を切り開いたことだろう。中国に接近したのは、東西冷戦期のソ連をけん制し、デタント（緊張緩和）を優位に進めようと考えていたからだ。交渉は簡単ではなかったはずだが、1971年に極秘訪中し、翌年

のニクソン訪中にあわせて上海コミュニケ（米中共同声明）をまとめあげ、その後の米中国交正常化に道筋をつけた。

キッシンジャー氏が取り組んだ対中政策には、さまざまな評価がある。しかし、在任中も退任後も中国を訪問し続け、中国を知ろうと努めた。実際、中国を取り込んだことによって国際政治が一時期とはいえ安定し、中国の発展が世界に利益をもたらしたのも事実だ。

私は2007年にキッシンジャー氏に初めて会った。博士論文を書いていた時期で、縁あって彼の日本滞在の調整を担当した。1週間の滞在中、朝から晩まで付きっきりで彼の考えを聞くことができた。自国の目先の利益に関する話題は一切なく、この先の世界

がどう動いていくのかを捉えることにこだわっていたことがいつも印象的だった。

一方で、現実主義であるあまり、軍事政権を支援するなど人権問題にあまり関心がなく、秘密主義的な手法も批判を浴びた。また、回顧録で主張した内容も、公文書を元にした最新の研究では必ずしも正確ではない。彼の外交が、米国の国益や国際秩序の構築にどう結びついたのかは、今後とも検証の余地があるだろう。

晩年、キッシンジャー氏はどうすれば中国と共存できるか、大国間の戦争を避けられるかを考えていた。米国の対決一辺倒の対中姿勢に批判的で、究極的にどのような国際秩序を目指したいのかを最後まで問い続けていたと考えている。【聞き手・松本紫帆】